

## 2018-19 年日独音楽隊交流

### — 双方向の3つの防衛交流のキセキ —

#### Japan - Germany Military Band Exchanges 2018-19 - Precious trajectory of 3 miraculous two-way Defense Exchanges -

桑原 和洋

#### はじめに

本稿の目的は、2018年から翌19年にかけて、自衛隊の音楽隊とドイツ連邦軍の軍楽隊が行った双方向の3つの防衛交流について、筆者自身を含む関係者の記録等を基に実績を書き留め、将来的な研究の資とすることにある。これらの交流については、それぞれの実施後に安全保障・防衛問題専門紙の記事<sup>1)</sup>や音楽隊長経験者の手記<sup>2)</sup>、各公演内容を記録した公式・非公式のYouTube動画等で個別に紹介されているものの、全体像の包括的な記録は手つかずである。そのため、後述するその意義に鑑みて、防衛交流として十分な評価がなされていない上、実際に参加した音楽隊員とその当時の関係者以外にはあまり知られていないのが実情である。

そこで、本稿では先ずはこれらの交流が着想されるに至った起源について、背景にある日独間の歴史的出来事を含めて振り返る。次いで当該音楽隊交流について、それぞれの演奏活動の場所・曲目・特性等の概要を整理した上で、3つの防衛交流の意義を検証する。最後に、将来的な防衛交流の資となり得る教訓について、若干の考察を試みる。

#### 1. 3つの防衛交流の背景にある歴史と着想の起源

先ず、3つの防衛交流の背景について見ていく。

2025年日本国際博覧会（大阪・関西万博）の開幕に際し、「1万人の第九 EXPO 2025」の演奏が行われたことが象徴するように、日本社会におけるベートーヴェン交響曲第9番ニ短調作品125（いわゆる「第九」）の人気は高い。特に年末には、恒例行事のように日本全国で演奏されるほどである<sup>3)</sup>。その「第九」人気の礎となった日本での合唱付全楽章初演は、1918年6月1日、徳島県の坂東俘虜収容所におけるドイツ軍俘虜軍楽隊による演奏だった<sup>4)</sup>。

この歴史に着目したのが、ベルリン在住の日本人作曲家、久保摩耶子だった。久保は2015年秋、在ドイツ日本国大使館を訪問し、3年後に日独両国が迎える特別な節目に関する提案を持ち掛けた。つまり、2018年に「第九」日本初演から百周年という節目を迎えるのを記念し、日独両国間の文化交流を促進するというアイデアだった。加えて久保は、その歴史的な「第九」初演がドイツ軍俘虜軍楽隊によって演奏された点にも着目し、ミリタリーの繋がりを重視して、2018年には自衛隊音楽隊が訪独して演奏することによって、日独友好関係の深化を一層際立たせるという具体案を提示した。

「第九」日本初演にまつわる歴史は、日本では2006年に映画化<sup>5)</sup>されたことなどから、いわゆる昭和世代を中心に広く認知されていた。他方ドイツでは、当事者や家族、その当時の歴史に専門的に向き合う研究者

等を除いて、ほとんど知られていなかった。このような状況を踏まえ、在ドイツ日本国大使館として検討した結果、戦争が発端であることに伴う捕虜当事者や家族の心情に対して十分に配慮しながら、自衛隊音楽隊による2018年の訪独演奏実現を追求する方針に決した。

中根毅、八木毅という2代に亘る大使の指導の下、大使館の広報文化班および政務班（特に防衛駐在官）が中心となり、日独外務・防衛両省の間で3年がかりの調整が行われた。その結果、幾多の困難な局面を経ながらも、3つの防衛交流が最終的に結実した。この調整過程において、日本の外務省により「第九」を通じた日独交流の年「DAIKU 2018」<sup>6)</sup>が設定されたことから、広く日独交流・相互理解を促進する雰囲気が醸成され、官民間問わず場所にも関わらず、関連する事業<sup>7)</sup>が少なからず取り行われることとなった。

## 2. 自衛隊音楽隊・ドイツ連邦軍軍楽隊による防衛交流の実績

ここでは、3つの防衛交流の具体的な演奏活動について見ていく。

### (1) 陸上自衛隊中央音楽隊アンサンブルの訪独演奏<sup>8)</sup> (2018年5-6月)

2018年5月25日から6月2日までの間、陸上自衛隊中央音楽隊（以降「陸中音」と表記）の副隊長志賀亨2等陸佐（当時）以下8名の音楽隊員は、ドイツのデュッセルドルフ・ハーメルン・ポツダム・ベルリン・ライプツィヒの5都市で公演を行った（図1参照）。

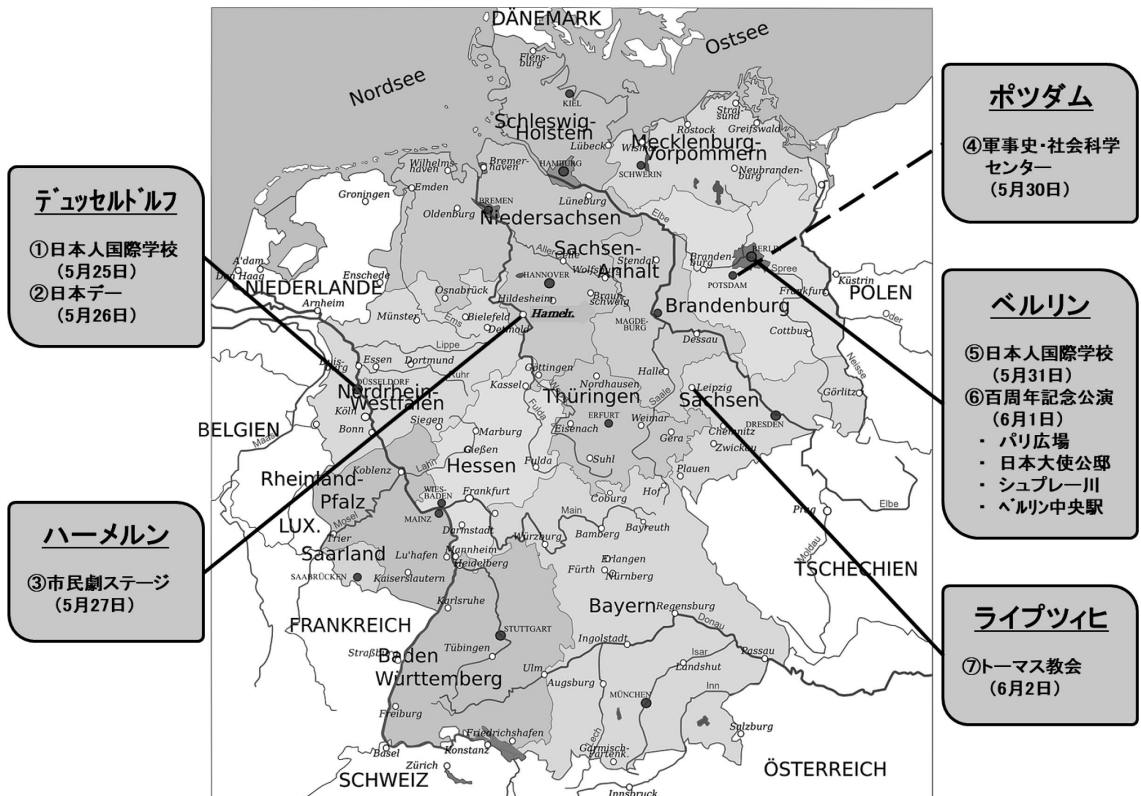


図1 陸中音アンサンブル公演一覧

アンサンブルは、金管五重奏に女性ヴォーカルを加えた編成だった。曲のレパートリーには、金管楽器のみの曲とヴォーカル付きの曲が用意され、聴衆が日本人でもドイツ人でも、子供から年配まで幅広い年齢層が楽しめるように工夫された。演奏会場は、在ドイツ日本国大使館が合計 10 公演を調整・準備し、そのうち 6 公演はベルリン所在のドイツ連邦軍参謀軍楽隊<sup>9)</sup> (Stabsmusikkorps der Bundeswehr、以降「独軍楽隊」と表記) の金管五重奏メンバーと合同で演奏された。ここから、それぞれの公演について振り返る。

### I. デュッセルドルフ<sup>10)</sup> 日本人国際学校での自衛隊単独演奏 (5月25日)

2018年5月25日13:15、陸中音アンサンブルは、デュッセルドルフ日本人国際学校で最初の演奏を行った。聴衆は、在校する小中学生約470名と教職員<sup>11)</sup>。演奏曲目は、日独両国国歌(ヴォーカル付き)から始まり、金管五重奏オリジナル作品『バラード』(和田信作曲)、『踊り明かそう』(フレデリック・ロウ作曲)、『となりのトトロメドレー』<sup>12)</sup> (久石譲作曲)、『ふるさと』(岡野貞一作曲)、『歓喜の歌』<sup>13)</sup> (ベートーヴェン作曲、坂井貴佑編曲)、『翼をください』(村井邦彦作曲)、『花は咲く(東日本大震災チャリティーソング)』(菅野よう子作曲)、『旧友“Die alte Kameraden”』(C. タイケ作曲、独行進曲)、『東京オリンピック・ファンファーレ』(今井光也作曲)・『オリンピック・マーチ』<sup>14)</sup> (古関裕而作曲)であった。

とりわけ児童の心を掴んだ曲は、『翼をください』<sup>15)</sup> だったに違いない。同校の音楽科教諭でバリトン歌手でもある星野高夫が、2番からサプライズ出演し、ヴォーカルの松永美智子陸士長(当時)と素晴らしいハーモニーを繰り広げたからだ。当初、驚きの笑い声をあげた児童が自然と口ずさみ、次第に大合唱へと発展する様子に、支援スタッフ一同は感動と達成感を覚えた。

### II. デュッセルドルフ日本デー<sup>16)</sup> での日独合同演奏 (5月26日)

5月26日13:20、日独両音楽隊は、2018年デュッセルドルフ日本デーの特設ステージ上で両国国歌を演奏した。続いて独軍楽隊が、『Feuerwerksmusik』、『Amazing Grace(独曲“Ein schöner Tag”のメロディーとして)』の2曲を単独演奏。次いで、陸中音が『東京オリンピック・ファンファーレ』・『オリンピック・マーチ』と『ふるさと』を単独演奏。その後、日独合同で『歓喜の歌』と『翼をください』を合奏し、約30分間と短い演奏ながら、数千人の聴衆を魅了して拍手喝采を浴びた。

この日、初演奏を見事に成功させた日独音楽隊であったが、実は合同練習は直前の1時間強に過ぎなかった。独軍楽隊の金管五重奏メンバーは、朝一番の飛行機でベルリンから移動し、ヒルデン(デュッセルドルフの南西約20km)に所在する独連邦軍教育軍楽隊(Ausbildungsmusikkorps)の演奏ホールに直行。待ち受けた陸中音隊員と、両国国歌や合奏曲について集中的にリハーサルした。それまで楽譜を交換して各々練習してきたものの、その限られた練習時間で仕上がるのかという不安もあった。短時間の練習で所望のレベルに到達できたのは、お互いが高度にプロフェッショナルであるからこそ成せた業と言えよう。

### III. ハーメルンでの自衛隊単独演奏 (5月27日)

5月27日11:00、陸中音アンサンブルは、ハーメルン市(デュッセルドルフの東約250km)の結婚式館テラス(Hochzeitshaus-Terrasse)で演奏した。この舞台は、毎週日曜正午に寓話「ハーメルンの笛吹き」の市民劇が催されることで有名で、ドイツ国内外から多くの観光客が訪れる。この恒常的な舞台があることに加え、日程的な適合性とデュッセルドルフ・ベルリン間の適度な位置関係、更には日本国大使館との調整パ

イブとなり得る人的繋がり存在という条件が同時に揃った高い偶然性により、この公演は成立した。大使館広報文化班の手際の悪い仕事により、約1週間前に地元紙に予告記事が掲載されたこともあり、最終的には数百名の聴衆が陸中音の生演奏を楽しんだ。

演奏曲目は、日独両国国歌に続き、『序奏とアレグロ』（酒井格作曲）、『踊り明かそう』、『御身がそばにあるならば“Bist du bei mir”』<sup>17)</sup>（J.S. バッハ作曲）、『目覚めよと呼ぶ声あり“Wachet auf, ruft uns die Stimme”』（J.S. バッハ作曲）、『ふるさと』、『花は咲く』（菅野よう子作曲）、『歓喜の歌』、『Horch, was kommt von draußen rein』（独民謡）、『旧友』であった<sup>18)</sup>。

公演後、音楽隊員はハーメルン市長から温かい賛辞と謝意を受け、特等席で最高の市民劇を堪能した。この公演は計10公演のうち、一地方都市と緊密に連携した特異なケースだった。こうした親密さもあってか、この日誕生日を迎えたトロンボーン奏者の林誠2等陸曹を、演奏者紹介の中で特別に紹介したところ、それに対して聴衆が“Happy birthday to you”の大合唱で呼応するなど、会場全体が温かい雰囲気包まれた<sup>19)</sup>。

翌日の地元紙Dewezetは、陸中音の演奏を以下のように絶賛している。

*6名の音楽隊員は、日本とドイツの曲を織り交ぜた変化に富むプログラムを披露した。(中略)日本の音楽隊員が、バイエルンのブラスバンドさながらにドイツ民謡を演奏しユーモアのセンスまでも披露すれば、感激する理由はまた一つ増える。卓越した技量の音楽家らが演奏する際の、伸び伸びとした軽やかな姿勢。非常に規律正しい日本の音楽隊から、誰がこのような姿を想像したであろうか。<sup>20)</sup>*

#### IV. ポツダムでの自衛隊単独演奏（5月30日）

5月30日18:00、陸中音アンサンブルは、ポツダム（ベルリンの西約30km）に所在するドイツ連邦軍軍事史・社会科学センターで演奏した。この公演はドイツ側の同センターによる主催で、軍事史シンポジウムと演奏会の融合というスタイルで行われた。具体的には、同センターの研究員が、第一次世界大戦におけるドイツ軍のアジア戦線をテーマとした研究発表を行い、その発表の合間合間に音楽演奏が行われる。自衛隊では発想すらされないような、ドイツ軍らしい<sup>21)</sup>ハイブリッドな催しで、事前広告を見た百名以上が会場を埋め尽くす盛況ぶりだった。

陸中音がここで新たに演奏した曲は、『主よ、人の望みの喜びよ』（J.S. バッハ作曲）、『一輪の花は咲きて』（J. ブラームス作曲）、『無言歌』（F. メンデルスゾーン作曲）であり、最後に日本の『ふるさと』<sup>22)</sup>で締め括った。古い建築様式の会場の雰囲気と、催しの特性に適合した秀逸な選曲だった。

演奏会後のレセプションでは、自衛隊に批判的なドイツ在住ジャーナリストを自称する女性が、制服姿の音楽隊員らに歩み寄って話しかける姿も見られた。このことは、音楽が思想・信条を越えて人の心を引き寄せる力を持つことを改めて想起させた。軍事史シンポジウムと音楽隊演奏という異色のコラボ企画が招いた、多様な聴衆ゆえの成果と言えるのかもしれない。

#### V. ベルリン日本人国際学校での日独合同演奏（5月31日）

5月31日10:00、日独両音楽隊は、ベルリンヴァンゼー地区に所在する現地校コンラート学校の屋外運動場で演奏した。当時、この学校の敷地内にベルリン日本人国際学校が並存し、約30名の小中学生が就学していた<sup>23)</sup>。聴衆は、日本人国際学校の児童・教職員・保護者とコンラート学校のドイツ人児童（一部）・教

職員数十名の、総勢約百名だった。

独日の順で両国国歌を合奏し、独軍楽隊・陸中音の順に単独演奏。最後に日独合同演奏で『歓喜の歌』、『ふるさと』等を演奏した。強い日差しの下、全員が文句も言わずに体育座りで楽曲に耳を傾ける日本人児童と、それとは対照的に思い思いに立ち上がり、幾人かはリズムに乗って踊りながら音楽を楽しむドイツ人児童のコントラストが、日独両国の国民性の違いを感じさせた。

## VI. ベルリン市内での日独合同演奏 (6月1日)

2018 (平成 28) 年 6 月 1 日は、1918 (大正 7) 年 6 月 1 日の徳島県での「第九」初演から文字通り 100 年という 1 世紀記念日だった。そのため、この日を特別にハイライトすべく、日独音楽隊はベルリン市内の至る所で演奏した。晴天に恵まれ、一部は厳しい日差しの下での演奏になったが、朝から晩まで音楽隊員は士気高く演奏任務を楽しんだ。

### i. ブランデンブルク門前パリ広場でのフラッシュモブ等 (09:30)

この訪独演奏の一番の目玉企画とも言えるのが、ブランデンブルク門を背景にするパリ広場でのフラッシュモブだった。この広場は、普仏戦争や東西ドイツ分断等、数々の歴史の舞台になってきており、日独の百周年の歴史を記念する上でこれ以上のステージはなかった。

09:30 にパリ広場中央において、ヴォーカルの松永陸士長がアカペラで、「第九」のメロディーを日本語の歌詞「晴れたる青空 ただよう雲よ 小鳥は歌えり 林に森に」と歌い出し、ハミングを交えて繰り返す。すると、広場外縁の 5 か所で楽器ごと待機していた金管五重奏日独ペアが、同じメロディーを吹奏しながら中央を目指す (図 2 参照)。

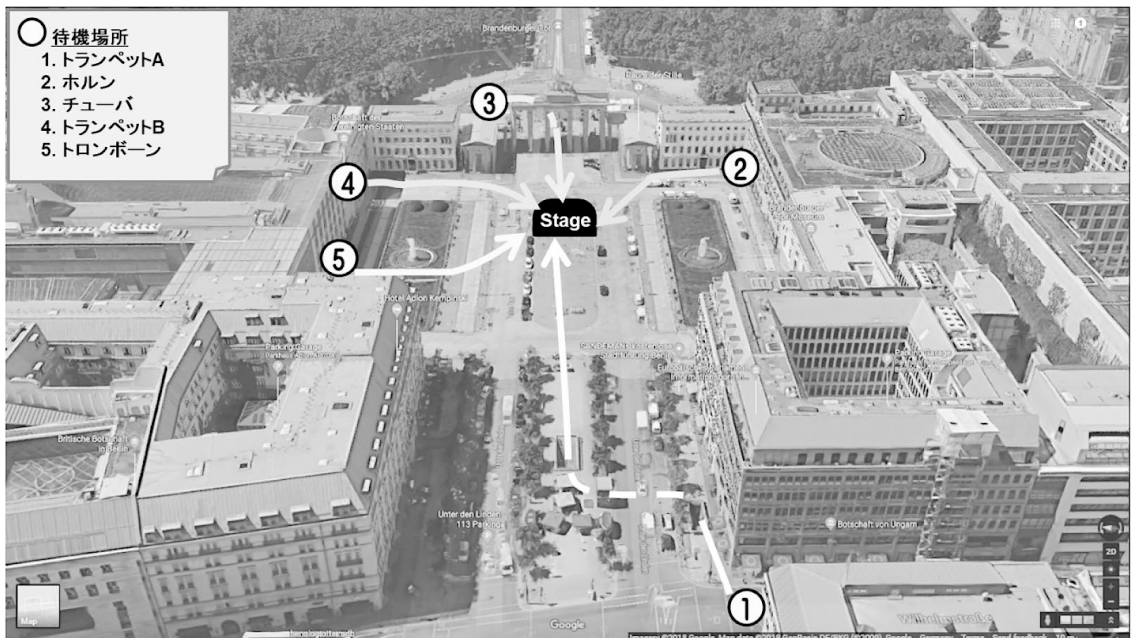


図 2 ブランデンブルク門前フラッシュモブ要図

ヴォーカルの声を基準に演奏を調整しつつ広場中央に集まり、隊員全員が半月隊形を整えるや、指揮者の志賀 2 佐が颯爽と中央に進み出て演奏を次なるパッセージへと進め、松永陸士長のドイツ語歌唱“Freude, schöner Götterfunken… (フロイデ、シェーネル・グッターフンケン…)”を伴うクライマックスへと誘う。演奏のラスト一音の余韻が、幸運にも広場に居合わせた聴衆の嘆息と喝采に呑み込まれた瞬間、一人のドイツ人男性の口から“Toll (最高)!”という言葉が洩れた<sup>24)</sup>。

司会が日独音楽隊演奏の趣旨説明を行なった上で、『上を向いて歩こう』（中村八大作曲）、『ふるさと』、『ベルリナルフト』（パウル・リンケ作曲）を合奏し、最後は日独国歌で約 30 分間のステージを締め括った。他の日独合同公演とは異なり、この公演では時間の都合上、日独の単独演奏は行わなかった。

この公演は、ブランデンブルク門を背景とした演奏動画を製作し、最終的に YouTube に公開することを意識して準備された点で、その他の公演と一線を画する。フラッシュモブでは、日独の各ペアを臨時編成の大使館職員がビデオ撮影し、在独 EU 代表部<sup>25)</sup>の EU 旗を映り込ませるなどの工夫も凝らした。また、在独フランス大使館の協力を得て、バリ広場に面したベランダから俯瞰映像を撮影したおかげで、演奏開始当初はゼロだった聴衆が徐々に惹き寄せられ、公演終了時には百名以上になる様子が記録された。

現場の聴衆は百数十名程度だったが、YouTube 動画として公開することによりその何万倍にもメッセージを伝えたいという挑戦的な企画は、現場の聴衆にとってはもちろん、演奏者側にも強い印象を残した。何より、日本とドイツという伝統を重んじる印象の強い国のミリタリーバンドが、2 カ国合同でフラッシュモブという比較的新しい演出方法<sup>26)</sup>を採ったこと自体、意義が大きい。

## ii. 在ドイツ日本国大使公邸での百周年記念演奏会 (12:00)

次なるステージは、在ドイツ日本国大使館に隣接した大使公邸だった。ベルリンの外交団や武官団、日独交流団体等からの招待者に対して、日独音楽隊の演奏が披露された。こちらで新たに演奏された曲として、独軍楽隊が『The Rejoicing』（G.F. ハンデル作曲）、『Brass Joker』（ジョー・グレイン作曲）を披露している。

主催した八木毅大使のスピーチは、「第九」百周年記念に象徴される日独友好関係の歴史について解説するとともに、将来的な両国間交流の発展に向けた期待感を抱かせた。またこの場で、「DAIKU2018」記念事業公式ロゴマークの公募で採用された、イラストレーターの前田みどりが表彰されるとともに、日独音楽隊交流の立役者としてドイツ連邦軍参謀軍楽隊長のラインハルト・キアウカ中佐に対して特別に謝意が表された。

## iii. シュプレー川での独海軍特務艇の船上演奏 (15:00)

ブランデンブルク門前でのフラッシュモブに負けずとも劣らないアイデア企画と評されたのが、このシュプレー川での公演だった。独海軍が保有し、VIP 対応などで使用される特務艇(小型ボート、海上自衛隊の『はしだて』に相当)が、首相府の横、連邦議会議事堂の脇、博物館島一带と 3 か所に移動し、その船上で日独音楽隊員が演奏した。

この中で目玉となった公演が、新聞紙面を通じて事前告知していた 15 時半からの連邦議会議事堂脇の演奏で、シュプレー川の両岸には数百名の聴衆が集まり船上演奏を楽しんだ。加えて、好奇心いっぱいの観光客を載せた観光船が行きかう中、特務艇の艇長が最小限のエンジン音で船の位置を巧みに制御し、船の両舷に縛着した DAIKU2018 の横断幕を掲げ続けた。

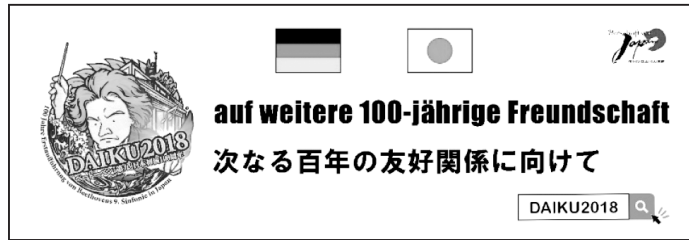


図3 横断幕（公演時には、基本的に毎回掲示された。）

こちらでの新たな演奏曲目としては、独軍楽隊による軍港キールを冠した『グリュース・アン・キール “Gruß an Kiel”』（フリードリヒ・シュポア作曲）があった。ドイツ人主体の聴衆に最も受けたのは、ベルリンを象徴する曲『ベルリナールフト』<sup>27)</sup>だった。この演奏は、当日夕方のRBB局ニュース番組ABENDSCHAUのニュース映像にも『歓喜の歌』とともに挿入され、八木大使の現場でのコメント映像も含めてベルリン・ブランデンブルク州を中心に広く配信された。

この公演は、独海軍も独軍楽隊も経験したことのなかった、船上から一般市民に向けて演奏するという企画を、日本国大使館が主導で実現したという点が意義深い。ドイツにおける日本人のイメージというと、真面目や時間に正確といった仕事マシ的な要素が先行しがちだが、そうした定評の斜め上を自衛隊という「お堅い」組織が突破したことになろう。しかもそれが、冷戦期に東西ベルリンを分断していたシュプレー川を舞台としたこともまた、本公演の価値を高めたと言えよう。

#### iv. ベルリン中央駅構内特設ステージでの演奏（18:30）

百周年記念の長い一日は、まだ終わらない。日独音楽隊がこの日最後に演奏した特設ステージは、ドイツ鉄道（DB: Deutsche Bahn）がベルリン中央駅構内の1階電光掲示板前（屋内）に、この公演のためだけに用意したものだ。ここでの公演は、パリ広場が万一悪天候だった場合の予備として、フラッシュモブ方式（日独ペアが5方向から登場する演奏開始要領）で準備された。

そのため、通常の公演では冒頭で演奏するドイツ・日本の国歌合奏が最後になる。また、演奏を耳にして聴衆が次第に集まることから、自然と最後の方が聴衆は多くなる。従って、聴衆が最も大きな声でドイツ国歌<sup>28)</sup>を唱和してくれたのがこの会場であり、演奏した自衛官の多くは鳥肌を覚えたという。この国歌演奏終了をもって、長い百周年記念日と日独合同演奏が無事に終わりを迎えた。

本公演は、場所を日本に置き換えて想像すると、東京駅日本橋口の構内で日独音楽隊が演奏したようなものである。その舞台を準備・提供したドイツ鉄道株式会社の懐の深さには感服するが、これは日本国大使館の国土交通省アタッシュの協力の賜物だった。ミニ霞が関と呼ばれる大使館の中で、縦割りではなく館員同士協力する雰囲気醸成されていたことも、この公演の成功要因の一つだった。

#### VII. ライプツィヒ・トーマス教会での自衛隊単独演奏（6月2日）

陸中音の演奏活動は、彼らの帰国前日まで続いた。実はこの公演は、現場に着くまでトーマス教会の脇の屋外で演奏するつもりだったが、ライプツィヒ・バッハ資料財団<sup>29)</sup>の特別な取り計らいにより、トーマス教会の聖堂内のバッハの墓前で演奏するという栄誉に浴したのだ。

演奏曲目は、全会場で演奏した日独国歌や『歓喜の歌』に加えて、その場に眠る J.S. バッハが作曲した『御身がそばにあるならば“Bist du bei mir”』、『目覚めよと呼ぶ声あり“Wachet auf, ruft uns die Stimme”』など。優美な調べが、聖堂内に反響した。

## IX. 陸中音アンサンブルによる訪独演奏の小括

自衛隊音楽隊が海外で、これほどまで多彩な舞台で演奏活動を行った例は過去になかった。しかも、平和の音楽というイメージの「第九」をテーマとして、かつての東西冷戦の舞台（デュッセルドルフ・ハーメルン：西独、ポツダム・ライプツィヒ：東独、ベルリン：分断の中心地）から発信したのだ。この強いメッセージ性は、特筆すべきだろう。

このような公演が成立した背景には、追い風になる時代の流れ、つまり、「第九」初演百周年を契機として日独交流・友好関係を深化させる、という日独両国民に共感され得るストーリーがあった。また、予算的制約を克服しつつ演奏効果・意義の大きな舞台を確保するという最大の障壁を、幸運にも独軍楽隊や日本国大使館の全面協力により克服できたことも大きな要因である。そうした条件が、鍵穴が通るかのように偶然にも全て整ったのが、陸中音アンサンブルによる 2018 年訪独演奏だった。

一連の演奏活動を通して、音楽隊員<sup>30)</sup>にはプロフェッショナルとしての新たな気付きや学びがあったという。例えば、国歌演奏時の譜面には表れないニュアンスのようなもので、何度も合同演奏を重ねることで、陸中音側はドイツ国歌の、独軍楽隊側は君が代の演奏が次第に洗練され、徐々に本家に寄って行く（来る）のが感じられたと言う。

また、予算的制約上ホテルでなくドイツ連邦軍の外來宿舎に宿泊し、隊員食堂で喫食し、軍楽隊の施設を使って練習したからこそ自衛隊との比較が可能になり、それを通じて得られた気付きもあった。例えば、教育軍楽隊の練習室は音響外傷予防の観点から真四角ではなく若干歪んだ四角であり、その集合体である建物全体も軍事施設らしい四角い形状からは程遠い。そのような実体験から、ドイツ連邦軍の徹底した隊員重視の姿勢や取組みを体感できたことは、参加隊員に強い印象を残したようだ。フル編成の音楽隊による国際軍楽祭参加とは一味違う多様な演奏体験を通じた学びが、帰国後に周囲の隊員に共有されて部隊全体の成長にも繋がったことだろう。

### (2) 航空自衛隊航空中央音楽隊による訪独演奏（2018 年 9 月）

陸中音アンサンブルがベルリンより飛び立ってから、僅か 3 か月半後の 2018 年 9 月 19 日、航空自衛隊航空中央音楽隊（以降「空音」と表記）隊長の松井徹生 2 等空佐（当時）以下、約 50 名の隊員がデュッセルドルフ空港に降り立った。フル編成の自衛隊音楽隊がドイツの地を踏むのは、1954 年の自衛隊創隊以降初めてのことである。

空音は 9 月 21 日・22 日の 2 日間、デュッセルドルフ ISS ドームで開催されたドイツ連邦軍主催のドイツ国際軍楽祭“Musikfest der Bundeswehr 2018”で、総勢 24,000 名もの観客に対して 3 回公演を行った。ドイツで著名な司会者ケルナー（Johannes B. Kerner）の軽快な司会の下、空音は多彩な全 6 曲の単独演奏を見事に果たした。

演奏曲目は、入場に際してのドラムマーチ～ファンファーレに引き続き、『インフィニティ』（和田信作曲、ブルーインパルス・フラッグ<sup>31)</sup>の演出とともに）、『スーパーマリオブラザーズ・テーマソング<sup>32)</sup>』（近藤浩

治作曲、マリオ・ルイージの赤緑帽子を着用した隊員が会場を盛り上げ)、『ふるさと』(岡野貞一作曲、ヴォーカルの森田早貴空士長(当時)が和装で歌唱)、『八木節』(外山雄三作曲、特別編成の和太鼓・横笛・摺り鉦隊との合奏)、『空の精鋭』(矢部政男作曲)だった。

また、フィナーレでは全出演バンド等と一緒に、『Frei Weg!』(独行進曲)、『Auld lang syne』(蛍の光)、『Somewhere』(映画 West side story より)、独国歌、『Am alten Schlossturm』(独行進曲)等を演奏した。出演バンドには、ベルリンから参加したドイツ連邦軍参謀軍楽隊(隊長はキアウカ中佐)が含まれた。

空音がこれらの演奏を通じて表現したのは、第一に日本国自衛隊の威容であり、次いで日本文化の魅力や親しみ易さであった。ミリタリーバンドらしいマーチで冒頭と最後を囲みながら、中間部に世界的に人気のゲームキャラクター・着物・祭り囃子を持ってくる表情豊かな演出に対して、欧州屈指の日本人街であるデュッセルドルフという土地柄も手伝って、大きな拍手喝采が寄せられるのが動画<sup>33)</sup>にも残されている。

参加した空音隊員は皆、この演奏を通じて学びを得た。中でも、他国の軍楽隊<sup>34)</sup>の表情や質の高い演奏などで表現された、自衛隊を凌ぐほどの威容が印象深かったようだ。演奏班長の芳賀大輔1等空尉(当時)は、「演奏のプロフェッショナルとして感動を提供すると同時に、威容を示すプロでなくてはならない」<sup>35)</sup>と書き残している。また、軍楽隊が伝統重視で威容を示すことに徹する一方で、エンターテインメントの要素はガンサー等の軍人ではない民間人の演者が担い、全体として観客が満足する時間・空間を創造する。そうした役割分担のようなものも感じられたという。

国際交流の効能の一つは、自らと異なる考え方・視点・要領等を認識し、現状・課題把握を深掘りすることで新たな発想や活力が生じ、それが重要かつ実効的な施策の遂行に繋げられる点にあると考える。本公演では、複数国軍の音楽隊員同士が、異なる視点から相互に観察し、プロフェッショナルリズムの更なる高みへとともに刺激し合い成長する様を確認できた。このような学びと気付きこそ、防衛交流の本質であろう。なお、空音はその後9月28日から30日の間、隣国オランダ・ロッテルダムで開催されたオランダ国際軍楽祭“Nationale Taptoe 2018”<sup>36)</sup>でも、ドイツ国際軍楽祭と同様の演目で5回公演を行い、更なる学びと気付きを得て日本に帰国した。

### (3) ドイツ連邦軍参謀軍楽隊による訪日演奏 (2019年11 - 12月)

防衛省・自衛隊は毎年、日本武道館を会場として「自衛隊音楽まつり」を開催し、海外からのゲストバンドを含む音楽隊の他、防衛大学校儀仗隊や日本全国の自衛官和太鼓チームなどが質の高い演奏・演技を披露している。ゲストバンドは長らく、在日米軍やアジア諸国の軍楽隊が参加してきたが、2018年に初めて欧州から仏海軍軍楽隊が参加した。

2019(令和元)年の自衛隊音楽まつりのゲストバンドとしてその舞台に立ったのが、ドイツ連邦軍参謀軍楽隊(以降「独軍楽隊」と表記)だった。彼らは、前年5-6月の陸中音アンサンブルの訪独演奏に全面協力した立役者であり、前年9月のドイツ国際軍楽祭における空音の共演バンドでもあった。それだけに、訪日が叶った時の隊長キアウカ中佐の喜びはひとしおだった。

ドイツ連邦軍にとって、自衛隊音楽まつりのゲストバンド参加は初めてだったが、実は1988年に東京ドームと大阪城ホールで行われた国際マーチングバンドイベントに、西ドイツのドイツ連邦軍中央音楽隊(当時)が参加したとの記録<sup>37)</sup>が残っている。

21年ぶりに独軍楽隊を迎えた会場は、普段の日本武道館が東京オリンピック2020に向けて改修工事中だっ

たことに伴い、国立代々木競技場第一体育館だった。比較的横長であるステージの形状は、大編成にこだわる独軍楽隊にとって追い風だった。シェレンバウム<sup>38)</sup>という独連邦軍紋章を冠した楽器、グロッケンシュピール（手持ちの縦型鉄琴）や鼓笛隊（Spielmannszug）を含め、通常のゲストバンドの規模を遙かに上回る総勢約70名が、羽田・成田空港に3波に分かれて来日した。

11月30日・12月1日の2日間5公演において、独軍楽隊が単独演奏として披露した演奏曲目および演出は、下表のとおり。伝統的なマーチを基調としつつ、退場時には軽やかな地元の曲を演奏した。

No.	曲名・作曲者名	演出
1	『プロイセンの栄光“Preußens Gloria”』（ゴットフリート・ピーフケ作曲）	70名近い大編成を印象付ける4列縦隊で入場
2	『プロイセン・プレゼンティア行進曲“Preußischer Präsentiermarsch”』（フリードリヒ・ヴィルヘルム三世作曲）	独連邦軍紋章の十字を隊形で表現
3	『ヨルク軍団行進曲“Yorckscher Marsch”』（ベートーヴェン作曲）	「♡（ハート）日本」の人文字を隊形で表現
4	『十字軍ファンファーレ“Kreuzritter-Fanfare”』（リヒャルト・ヘンリオン作曲）	独連邦軍紋章の鷲を表す隊形に移行（退場準備）
5	『ベルリナルフト“Berliner Luft”』（パウル・リンケ作曲）	退場しつつ列の左右間隔の拡縮で鷲の羽ばたきを表現、「アリガトウ・ニッポン！」と発声

表 独軍楽隊演奏曲目・演出一覧

退場途中に曲をゲネラルパウゼ（一時的に休止）して足を止め、隊員全員が「アリガトウ・ニッポン！」と叫ぶ粋な演出に対しては、YouTube 動画<sup>39)</sup>のコメント欄でも好評価が目立つ。その一方で、1年前にドイツ国際軍楽祭で彼らと共演した空音隊員にとっては、そうした観客受けする演出が少々意外だったという。と言うのは、独軍楽隊は自国で、伝統を重んじて軍の威容を目一杯表現しており、日本の聴衆を喜ばせるような「サービス精神」とは程遠いイメージだったのだ。

実は、そのギャップの鍵を解くのが、独軍楽隊のキアウカ隊長や演出担当者ノルテクルマン軍曹の知られざる努力だった。彼らは、何をもってすればドイツ連邦軍ひいてはドイツ連邦共和国に対する日本国民の印象を最大限に引き上げられるかについて、周到に検討していた。空音のデュッセルドルフでのキャラクター演出を含む演奏や、2017年の自衛隊音楽まつりを直接見て研究していたのだ。その結果、核となる演奏自体や所作では伝統と威容を表現することを基調としながらも、日本の観客の心を掴む人文字隊形や発声などの演出をトッピングとして加えることで、威容とエンタメ性の二項対立ではないベストミックスを特別に創造したのだった。ここにも、防衛交流の本質が感じられる。

令和元年度自衛隊音楽まつりの演出には偶然、ベートーヴェンへのオマージュが2つ仕込まれた。1つは、海上自衛隊東京音楽隊太田紗和子1等海曹のピアノ演奏を前面に出した『Beethoven Collage』の演奏。もう1つは、フィナーレでの全体演奏曲『希望の歌』が、「第九」の旋律をベースとした楽曲であったことだ。フィナーレでは、かつて敵・味方双方の立場で戦火を交えた日米独ベトナム四カ国の国旗が並ぶ中、その各国の音楽隊員が「全人類は皆兄弟となる。Alle Menschen werden Brüder.」のメロディーを演奏した。1918年6月の「第九」日本初演から101年半の後、新たな歴史が東京で刻まれた。

独軍楽隊の隊長キアウカ中佐は帰国後、訪日演奏に関する紀行文をドイツ連邦軍軍楽隊の部内機関誌<sup>40)</sup>に執筆し、以下のように締め括った。

*2019年12月3日、火曜。15時20分。東京羽田発フランクフルト・アム・マイン行きのLH717便が飛び立つ。飛行機に座り、素晴らしい国民を擁するこの壮大な国を、機上から眺める。数え切れない感動が頭の中をよぎるが、あまりに鮮烈すぎてまとめきれない。しかし、一つの考えが固まった。つまり、友人や兄弟はもう二度と敵同士になってはならない、世界中のどこにおいても！*

### 3. 3つの音楽隊交流の意義

では、これまで見てきた音楽隊による3つの防衛交流の意義について考察したい。

令和7年版の防衛白書によると、「防衛協力・交流は、様々なツールを使って二国間・多国間の防衛関係を強化すること」と定義され、その目的の1つとして「わが国にとって望ましい安全保障環境の創出」が挙げられている。また、防衛協力・交流のツールの1つとして「部隊による協力・交流」が挙げられ、「部隊同士の交流行事などを通して、相手国との相互信頼を高め、協力関係を推進する他国との共同訓練や演習においては、相手国の部隊と連携する力を高めることで、技量向上に加え、国同士の防衛関係を強化する」と説明している<sup>41)</sup>。これらに照らして、本防衛交流の意義を整理する。

#### (1) 望ましい安全保障環境の創出

日独音楽隊交流が行われた2018年から19年当時は、ロシアによるクリミア侵攻（2014年）とウクライナ侵攻（2022年）の狭間で、欧州における冷戦終結後の比較的平穏な情勢が脅かされつつある危機感が広く共有されていた。そのような情勢の下、日独両国が過去の恩讐を越えた固い友好関係を「DAIKU2018」で発信したわけだが、その時期にミリタリーバンドが相次いで発信したことの意味は小さくない。

また、陸海空自衛隊各中央音楽隊（フル編成のみ）の海外派遣演奏実績と自衛隊音楽まつり参加ゲストバンドについて俯瞰<sup>42)</sup>すると、相関性が認められるケースはほぼ無いことが分かる。そのような中、陸上・航空自衛隊の2つの中央音楽隊が関わる訪独演奏と、独軍楽隊の訪日演奏が、約1年半という短期間のうちに双方向で実現されたことは特異である。音楽隊という自衛隊の有するソフトパワーを戦略的に集中運用し、望ましい安全保障環境の創出に向けた強いメッセージを発信したケースと評価されよう。作曲家の久保が、大使館に託したアイデアの原石は、双方向性と多層性をまとうことにより、予想を超えて高価値な貴石になったと言えよう。

#### (2) 相手国との相互信頼向上、協力関係推進

百年余り前、敵同士として憎しみを抱え戦闘を繰り広げた日独両国だったが、そのミリタリーバンドが1世紀の時間を経て双方向の演奏旅行を行い、ドイツ軍俘虜が演奏した「第九」の「全人類は皆兄弟となる。Alle Menschen werden Brüder.」の旋律をそれぞれの国民の前で演奏した。

日独両国に共通する歴史的記憶を、音楽隊というソフトパワーを動員して100年越しで改めて提起し、過去から現在の友好関係を振り返るとともに、「Auf weitere 100-jährige Freundschaft 次なる百年の友好関係に向けて」という横断幕にあるような、未来志向のメッセージを発信する新たな軌跡を刻んだ。外務省の

「DAIKU2018」という記念事業を踏まえ、そこにミリタリーバンドが象徴的な柱を据えたことは、相互信頼・協力関係を更なる高みに導く上で特別な意義があったと言えよう。

### (3) 技量向上、国同士の防衛関係<sup>43)</sup>強化

本稿で扱った3つの音楽隊交流全てに関係したドイツ連邦軍参謀軍楽隊は、国賓儀仗演奏を主任務とし、国内最高峰の演奏レベルを誇る。ドイツ連邦軍には他にも14コ（教育軍楽隊を含む）の音楽隊があるが、国賓儀仗任務を有する参謀軍楽隊だけは、基本的に首都ベルリン近傍から離れない原則がある。その中で参謀軍楽隊が日本の自衛隊音楽まつりに派遣され、更にその現場で陸中音・空音の旧友と再び共演できたことは、奇跡にも近い。この裏には、軍楽隊本部<sup>44)</sup>や国防省・連邦軍の上層部を動かした、キアウカ隊長の熱意に基づく長期間の調整があった。

独軍楽隊にも、自衛隊音楽まつりへの参加を通じて学びや気づきがあったようだ。キアウカ隊長は、自衛隊の音楽隊の演奏について、「演奏の質の高さとバラエティの豊かさ、非常に丁寧な公演の準備に感銘を受けた」<sup>45)</sup>と感想を述べている。このように、単に音楽的な演奏技量に留まらず、公演準備といった管理面についても参考になったというのは、前年の陸中音・空音による訪独演奏にも共通している。

また、陸海空の自衛隊音楽隊員の中には、6年近く経過した今でも、令和元年度自衛隊音楽まつりの独軍楽隊の演奏を伝説のように記憶している隊員が少なくない。それだけ音楽隊員の演奏技量向上に、大きなインパクトを与えたと言えよう。音楽隊員以外でも、観覧した国会議員、統合・陸海空幕僚監部の現役将官やOB、防衛省内局や防衛装備庁を含む高官が、独軍楽隊の約70名<sup>46)</sup>による大迫力かつ圧巻の演奏・演出力に魅了され、独連邦軍との交流価値に改めて注目したに違いない。

その筆頭と言える河野太郎防衛相（当時）は、自衛隊音楽まつりの最終公演後に、キアウカ隊長に記念品を贈呈して固い握手を交わし、温かく“Danke schön!”と伝えた<sup>47)</sup>。更に、翌2020年2月の日独防衛相会談で、クランプ＝カレンバウアー国防大臣（当時）に対してもゲストバンド派遣に対する謝意を伝えた<sup>48)</sup>。

この音楽隊交流の直後に世界はコロナ禍を迎え、軍同士の交流は世界的に停滞期を迎える。しかし、コロナ禍の初期の影響が薄れるのと機を同じくして、日独両国の防衛関係が目覚ましい発展を遂げる。ドイツ政府の「インド太平洋ガイドライン」<sup>49)</sup>発表（2020年9月）を皮切りとして、独海軍フリゲート艦日本寄港（2021年11月）、独空軍戦闘機等日本派遣（2022年9月）、独国防大臣16年ぶり来日（2023年3月）、独空軍戦闘機等日本派遣および日独ACSA発効（2024年7月）、独海軍フリゲート艦・補給艦日本寄港（2024年8月）、独陸軍空挺隊員の令和7年降下訓練始め（NYJIP25）参加（2025年1月）と続いており、この傾向は定着しそうだ。

### おわりに

ここまで、陸中音・空音・独軍楽隊による3つの音楽隊交流の着想の起源に始まり、各公演の実績を整理した。その中で、防衛交流の本質と考えられる要素についても確認し、その上で全体としての意義について考察した。最後に、防衛大学校学生の修養の参考になるよう、企画者兼伴走者たる筆者の主観にはなるが、本防衛交流からの教訓について書き残したい。

各省庁の取組みの相乗効果という点に注目すると、本稿で紹介した日独音楽隊交流は、外国との文化交流において自衛隊の防衛交流が他省庁と連携して果たし得る役割の新たな一例を提示したと言えよう。その成

立にとって重要だった要素は、まずは管理者の懐の深いリーダーシップであり、外務省・防衛省関係者の理解や尽力であったことは論を待たない。

加えて担当者としては、国益という動機から来る粘り強く困難に負けない信念、日独防衛交流の価値に対する確固たる自信、既存の枠組みや先例に捉われず創造的な仕事に挑戦する発想や好奇心、謙虚で柔軟な姿勢とコミュニケーション、更には職場で協力を得るための平素からのポジション取りや雰囲気づくりが、殊の外重要であった。

将来、防衛駐在官に就いたり防衛交流に従事する幹部自衛官、そしてそれを目指す防衛大学校学生には、過去の実績や従来の要領に捉われない柔軟な発想で、新時代の道を切り拓いて頂きたい。また、防衛交流や海外訓練などで自衛隊が外国に行く際には、外務省・JICA等との連携について検討する視点と余裕を持ちたいものである。

自衛隊音楽隊は、自衛隊と日本社会を繋ぐ重要な役割を担うと同時に、世界の国々に向けて日本国や自衛隊を発信する広告塔の役割も担っている。特に後者は、自衛隊音楽隊が「音という実弾」を用いて他国の軍楽隊と真剣勝負をすることを意味する<sup>50)</sup>。昨今では、陸中音がパプアニューギニア軍楽隊を育成する等、音楽隊の活躍は能力構築支援分野にも裾野を広げている。更に、音楽隊交流が相手国の社会との接点（聴衆）を持つ場合、その国民に対しても有効に作用し得ることはこれまで見てきた通りである。

一部メディアでは、自衛隊音楽まつり不要論<sup>51)</sup>などの厳しい論調も目にするが、自衛官や防衛大学校学生には、他国の軍楽隊との音楽隊交流から得られる教訓の貴重さを理解し、そこから学ぶ謙虚な姿勢を持って頂きたい。それによって自衛隊は、より一層精強で魅力的なミリタリーに成長するだろう。本稿が、将来的な同盟国・同志国間の防衛交流、特に音楽隊交流の深化・発展に寄与することを期待する。

## 謝辞

2026年3月末をもって、廣瀬佳一教授が退官されることとなった。筆者は2013年から14年、防衛大学校総合安全保障研究科前期課程の1年制の新規導入という試みに挑戦したが、修士論文指導教官として伴走して下さったのが広瀬先生である。クラシック音楽にも造詣が深い広瀬先生に、防衛駐在官（2015-18年）就任前に出会えたことと、その1年間に伸ばして頂いた学識や柔軟な発想がなければ、本稿で紹介した音楽隊交流のインパクトは半量だったかもしれない。

奇遇にも、ご退官前の最後の1年弱を防衛大学校でともに勤務し、本稿を執筆する機会を得たことは、このご縁のお陰である。広瀬先生に対し、これまでお世話になった幾多の本科・研究科学生を代表し、改めて深く感謝を申し上げたい。

また末筆ながら、本稿執筆にご協力頂いた陸海空自衛隊音楽隊の関係各位に、心よりお礼を申し上げる。

## 文末脚注

- <sup>1)</sup> 一例として、ドイツ連邦軍音楽隊による令和元年度自衛隊音楽まつり参加に関する記事に関しては、朝雲「音楽は人を結びつける言語」(2019年12月5日、第3383号)、防衛ホーム「初参加！ベトナム・ドイツ」(2019年12月15日、第1017号)、朝雲「日独音楽隊が『第九』を演奏」(2020年1月16日、第3388号、筆者執筆)などがある。
- <sup>2)</sup> 樋口孝博『音楽隊に「敬礼っ!!」元隊長が語る自衛隊音楽隊の真骨頂』(音楽之友社、2024年)、95頁。
- <sup>3)</sup> 等松春夫「大日本帝国と《第九》 - 『年末恒例』の原点』『誕生250年 ベートーヴェン《第九》すみからすみまで』音楽之友社、2020年、92頁。なお、「第九」(英語 ninth、独語 neunt) という序数が単体で交響曲の愛称として機能することは、ベートーヴェンゆかりのドイツやオーストリアですら見られない現象であり、日本での特別に高い受容度を表している。
- <sup>4)</sup> 第一次世界大戦の日独戦からドイツ軍俘虏軍楽隊の「第九」演奏までの歴史については、徳島県鳴門市公式ウェブサイト「なると第九」に詳しい。<https://www.city.naruto.tokushima.jp/contents/daiku/>。  
なお、本稿に関する参考文献の URL については、2025年7月4日にアクセスしたものである。
- <sup>5)</sup> 『バルトの楽園 (Ode an die Freude)』2006年公開、松平健主演。この他、「第九」初演の歴史を主テーマとした徳島県の鳴門市ドイツ館が、ホームページを含め参考になる。
- <sup>6)</sup> 外務省『DAIKU2018』[https://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/c\\_see/de/page22\\_002942.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/c_see/de/page22_002942.html)。
- <sup>7)</sup> 外務省『「DAIKU2018」記念事業一覧』[https://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/c\\_see/de/page23\\_002444.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/erp/c_see/de/page23_002444.html)。
- <sup>8)</sup> この訪独演奏に対して、陸中音隊員のデュッセルドルフ空港到着(5月24日夕)からベルリン・テゲル空港出発(6月3日昼)まで終始を通じて、宿泊用外来宿舎や移動用バス等のロジ面を独軍楽隊が全面支援した。特に、専属のヨヘン・ノルテクルマン (Jochen Noltekuhlmann) 軍曹が常時同行支援したことは、演奏活動全体の整齐円滑な運営と質の高い演奏活動に大いに寄与した。また、全体を通して防衛駐在官(筆者)が日独英語の混合で司会を務め、曲紹介はもちろん、「第九」日本初演百周年を記念する日独音楽隊合同演奏の意義等についても解説した。
- <sup>9)</sup> ベルリン・テゲル空港(当時)近傍のユリウス・レバー駐屯地 (Julius-Leber-Kaserne) に所在し、大統領府・首相府・国防省等における国賓儀仗演奏を主任務とする軍楽隊。高い演奏レベルで定評があり、ベルリン・フィルハーモニー・大ホールで毎年行う定期演奏会は、毎回満員となる。隊長のラインハルト・キアウカ (Reinhard Kiauka) 中佐は、一連の音楽隊交流成功の立役者となった。
- <sup>10)</sup> ノルトライン・ヴェストファーレン (NRW) 州の州都であるデュッセルドルフは、1960年代以降欧州屈指の日本人街となり、当時も約七千名の日本人が居住していると言われた。
- <sup>11)</sup> デュッセルドルフ日本人国際学校での公演は、演奏会場(体育館)の広さから在校児童のみ・保護者なしでの観覧となったが、一部の保護者は翌日の日本デーで児童と一緒に演奏を聴いてくれた。  
なお、海外の日本人国際学校での自衛隊音楽隊による演奏は、海上自衛隊練習艦隊音楽隊(遠洋練習航海のために臨時編成される音楽隊)が寄港時に演奏するケースは存在したものの、音楽隊単独の海外公演ではそれまで例がなかった。2018年のドイツ公演後、空音によりベトナム(2023年)・フィリピン(2024年)では公演先の一つに含まれ、定着化の兆しが見られるが、児童に対する音楽教育への貢献と、幼少期での自衛隊の活動認知という2つの効果が、関係者に評価された可能性もある。
- <sup>12)</sup> この演奏の動画は、<https://www.youtube.com/watch?v=UQ2sAuJyTIM> から視聴可能(別表1「動画リンク・QRコード一覧」)。
- <sup>13)</sup> 陸中音は本訪独演奏のために、交響曲である「第九」第4楽章の中盤部分を金管五重奏と女性ヴォーカル用に特別にアレンジした楽曲『歓喜の歌』を準備した。
- <sup>14)</sup> <https://youtu.be/F9JwqeYRnys?si=j3GT29Nhm5cNc719>。なお、動画の後半には、後述するデュッセルドルフ日本デーでの『歓喜の歌』と、ハーメルンでの“Horch, was kommt von draußen rein”を収録している。
- <sup>15)</sup> [https://www.youtube.com/watch?v=jMAqH\\_qDcZw&t=15s](https://www.youtube.com/watch?v=jMAqH_qDcZw&t=15s)。
- <sup>16)</sup> デュッセルドルフでは2002年より毎年1回、NRW州・日本商工会議所等主催の日本文化の祭典「日本デー (Japan Tag)」がライン川沿いで行われ、日本国総領事館も運営を支える。特設ステージでの日本舞踊や和楽器演奏、出店での交流団体等によるグッズ販売・コスプレイベントなどで賑わい、夕方の花火で締め括るのが定例。近隣国からも特にポップカルチャーファンが集結し、2018年の来場者は60万人にも上った。
- <sup>17)</sup> <https://www.youtube.com/watch?v=HsvFjqIqTu8>。
- <sup>18)</sup> ハーメルンでは11:35に「笛吹き男の曲」の大きな鐘の音が1分以上にわたり鳴り響く。これに伴う演奏の間隙を演出として有効に活用するため、その直前に DAIKU2018 の意義を解説した。これにより、1世紀前には敵国だった日本の音楽隊が、今こうして中世ドイツの街並みの中で平和の音楽を奏でている幸福を、聴衆と共有する時間に

した。

- <sup>19</sup> [https://www.youtube.com/watch?v=P\\_Mj0vih\\_IY](https://www.youtube.com/watch?v=P_Mj0vih_IY). 通常ドイツでは、ドイツ語の歌詞 “Zum Geburtstag viel Glück” が歌われるが、この場では相手が日本人なので瞬時に英語が選択されたものと考えられる。
- <sup>20</sup> Dewezet 紙 (2018 年 5 月 28 日付) 『日本人がベートーヴェンを愛するとき - 陸上自衛隊中央音楽隊がハーメルンの街頭で注目される』。
- <sup>21</sup> ドイツ連邦軍では、課程教育の卒業式などで、祝辞や卒業証書授与の合間合間に軍楽隊アンサンブルが演奏する形式が一般的である。
- <sup>22</sup> [https://youtu.be/Kk9Q2K6\\_fMI?si=PGyowd9bZsmOJ7Kd](https://youtu.be/Kk9Q2K6_fMI?si=PGyowd9bZsmOJ7Kd). ドイツ在住歴の長い大使館の日本人職員が、この曲が掻き立てる格別の郷愁の念を目を腫らしながら訴え、感謝する姿も見られた。
- <sup>23</sup> 土地柄、大使館職員の子供 (筆者自身の子供 2 名を含む) も多く、本公演は大使館内でも感謝された。
- <sup>24</sup> [https://youtu.be/wdcfr9MK\\_7U?si=QAZdf3mN00rx1Eq2](https://youtu.be/wdcfr9MK_7U?si=QAZdf3mN00rx1Eq2).
- <sup>25</sup> 「第九」の一部は 1972 年に、歌詞を伴わないメロディーのみで欧州の歌 (国歌に該当) に採用されている。
- <sup>26</sup> 2015 年 10 月に、格闘家の須藤元気率いる WORLD ORDER がパリとベルリンを舞台とした PV を動画配信しており、パリ広場も登場している。自衛隊音楽隊関連では、2018 年 2 月に海上自衛隊舞鶴音楽隊が八坂神社で行ったフラッシュモブが YouTube 動画になっている。
- <sup>27</sup> <https://youtu.be/LGQ2SQPKWX8?si=iT01KXNVNY4D1Z3L>.
- <sup>28</sup> <https://youtu.be/PqPaXTiK4y4?si=jB-Kfk030Sznfd7n>. 本会場で胸に手を当てつつ国歌を斉唱するドイツ人女性の姿が、動画に残っている。
- <sup>29</sup> 日本人の高野昭夫が勤務し、大使館との連携も深かったため成立した。
- <sup>30</sup> ここまで名前を挙げていない隊員として、連絡幹部持丸周子 2 等陸尉、トランペット 2 等陸曹矢口幸一・3 等陸曹平木綾香、チューバ 2 等陸曹加藤洋介、ホルン 3 等陸曹上原佑が参加した (階級は当時のもの)。
- <sup>31</sup> 5 機のブルーインパルスの機体が白地に描かれた巨大フラッグのこと。3 名の隊員が操作し、演奏中の音楽隊員の頭上を前方から後方に通過させる、自衛隊音楽まつりでは定番となっている演出。
- <sup>32</sup> 当公演から約 2 年前、リオデジャネイロ五輪 2016 の閉会式において、安倍首相 (当時) がスーパーマリオの衣装や土管で東京五輪 2020 への引継ぎを演出していた。航空自衛隊によるこの選曲・演出は、多くのドイツ人観衆に対して日本への親近感を醸成する相乗効果を有したはずである。
- <sup>33</sup> [https://youtu.be/GgvpIhMB59g?si=MZMU\\_Qzq\\_BAflfHN](https://youtu.be/GgvpIhMB59g?si=MZMU_Qzq_BAflfHN).
- <sup>34</sup> 独国際軍楽祭にはドイツの他、日本、フランス、オーストリア、ハンガリー、米国、スコットランドから軍楽隊等が参加し、総勢 800 人となった。
- <sup>35</sup> 空音演奏班長 3 等空佐 芳賀大輔 「海外演奏体験記」航空自衛隊機関誌『翼』(第 119 号、令和元 (2019) 年 11 月号)、107-111 頁。
- <sup>36</sup> [https://youtu.be/X\\_6WGpQVB3k?si=KHYN0GLNyUl\\_nJCE&t=4986](https://youtu.be/X_6WGpQVB3k?si=KHYN0GLNyUl_nJCE&t=4986).
- <sup>37</sup> 1988 年 3 月 19-20 日に、マーチングバンド世界選手権 ( ' 88 INTERNATIONAL MARCHING BAND PAGEANT) が行われ、日本人バンド THE ALFEE がゲスト演奏を務めた。3 月 20 日の公演は、出演者 907 名 (12 か国)、観客 45,000 名。その様子の動画は、<https://youtu.be/hSloXOxXgD0?si=ExWbMXbY4Ed8jIho>。なお、大阪城ホール公演は日付等細部不明。
- <sup>38</sup> Schellenbaum は、トルコクレセントとも呼ばれる、T 字型の棒の先に鈴をつけた楽器。
- <sup>39</sup> 独軍楽隊の単独演奏全体の動画は、以下の海上自衛隊公式チャンネル以外にも多数存在する。<https://youtu.be/syK4l4DnXQo?si=emfyJSlocFPb3eIh>。
- <sup>40</sup> Oberstleutnant Reinhard Kiauka, „Wiedersehen mit Beethoven: Das Stabsmusikkorps der Bundeswehr in Japan“, „MIT KLINGENDEM SPIEL“ (42. Jahrgang Nr. 3/4 - 2019), pp.32-36.
- <sup>41</sup> 防衛省『令和 7 年版 日本の防衛「防衛白書」』、図表Ⅲ =3-1-1「防衛協力・交流とは」、362 頁。
- <sup>42</sup> 別表 2「音楽隊海外演奏国・自衛隊音楽まつりゲスト国一覧」のとおり。
- <sup>43</sup> 意味としては「防衛交流・協力関係」の方が近いが、本稿では防衛白書の用語に合わせて「防衛関係」と記載する。両国間の相互の防衛義務などを念頭に置くものではない。
- <sup>44</sup> 軍楽隊本部は、陸海空の軍種に関わらずに軍楽隊を一元的に束ねる組織で、軍楽隊に関する運用・人事・装備に至るまで、全般を統括している。旧西ドイツの首都であるボンに所在している。
- <sup>45</sup> 朝雲「音楽は人を結びつける言語」(2019 年 12 月 5 日、第 3383 号)。
- <sup>46</sup> 前年 2018 年に欧州組として初参加した仏海軍軍楽隊は、約 20 名の編成だった。

<sup>47)</sup> 筆者は当時、陸上自衛隊教育訓練研究本部から派遣されたゲストバンド受入れ支援要員（元防衛駐在官）の立場で、この現場に立ち会った。

<sup>48)</sup> [https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13120860/www.mod.go.jp/j/approach/exchange/dialogue/munich/msc\\_56.html](https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13120860/www.mod.go.jp/j/approach/exchange/dialogue/munich/msc_56.html).

<sup>49)</sup> <https://japan.diplo.de/resource/blob/2438992/ecb79aa5e7659d5eaf7e4046598a318f/indo-pazifik-leitlinien-japanisch-data.pdf>.

<sup>50)</sup> モスクワでのロシア国際軍楽祭「スパスカヤ・タワー」2019に参加した陸中音は、ロシア・中国・北朝鮮の軍楽隊と同じ舞台上で演奏している。

<sup>51)</sup> 文谷数重『観閲式に音楽祭…自衛隊のイベントは必要か』（東洋経済オンライン、2025年2月15日）、<https://toyokeizai.net/articles/-/858068?display=b>。この中で文谷は自衛隊音楽まつりに関して、必要性が不明確、募集効果が皆無などとして不要論を展開しているが、本稿を通じて新たな視点が共有されることを期待する。他方、音楽隊の根本的意義や必要性を認めつつ、行事縮小による隊員負担軽減、（別稿だが）組織効率化や統合運用を提言している点は、建設的な議論として傾聴すべきだろう。

動画リンク・QRコード一覧

連番	年	部隊	公演・曲目等	動画リンク	QRコード
1	2018	陸中音 アンサンブル	デュッセルドルフ日本人国際学校 『となりのトトロ・メドレー』	<a href="https://www.youtube.com/watch?v=UQ2sAuJyTIM">https://www.youtube.com/watch?v=UQ2sAuJyTIM</a>	
2	2018	陸中音 アンサンブル	デュッセルドルフ日本人国際学校 『オリンピック・マーチ』 デュッセルドルフ日本デー 『歓喜の歌』 ハーメルン "Horch, was kommt von draußen rein"	<a href="https://youtu.be/F9JwqeYRnys?si=j3GT29Nhm5cNc719">https://youtu.be/F9JwqeYRnys?si=j3GT29Nhm5cNc719</a>	
3	2018	陸中音 アンサンブル	デュッセルドルフ日本人国際学校 『翼をください』	<a href="https://www.youtube.com/watch?v=jMAqHLqDcZw&amp;t=15s">https://www.youtube.com/watch?v=jMAqHLqDcZw&amp;t=15s</a>	
4	2018	陸中音 アンサンブル	ハーメルン "Bist du bei mir"	<a href="https://www.youtube.com/watch?v=HsvFjqIgTu8">https://www.youtube.com/watch?v=HsvFjqIgTu8</a>	
5	2018	陸中音 アンサンブル	ハーメルン 演奏者紹介・"Happy birthday to you"	<a href="https://www.youtube.com/watch?v=P_Mj0vih_IY">https://www.youtube.com/watch?v=P_Mj0vih_IY</a>	
6	2018	陸中音 アンサンブル	ポツダム 『ふるさと』	<a href="https://youtu.be/Kk9Q2K6_fMI?si=PGyowd9bZsmOJ7Kd">https://youtu.be/Kk9Q2K6_fMI?si=PGyowd9bZsmOJ7Kd</a>	

## 動画リンク・QRコード一覧

連番	年	部隊	公演・曲目等	動画リンク	QRコード
7	2018	陸中音 アンサンブル	ベルリン・バリ広場 『歓喜の歌(フラッシュモブ)』	<a href="https://youtu.be/wdcfr9MK_7U?si=QAZdf3mN00rx1Eg2">https://youtu.be/wdcfr9MK_7U?si=QAZdf3mN00rx1Eg2</a>	
8	2018	陸中音 アンサンブル	ベルリン・シュプレー川 『ベルリナールフト(ベルリンの風)』	<a href="https://youtu.be/LGQ2SQPKWX8?si=iT01KXNVNY4D1Z3I">https://youtu.be/LGQ2SQPKWX8?si=iT01KXNVNY4D1Z3I</a>	
9	2018	陸中音 アンサンブル	全公演先 『ドイツ・日本両国国歌』	<a href="https://www.youtube.com/watch?v=PqPaXTiK4y4">https://www.youtube.com/watch?v=PqPaXTiK4y4</a>	
10	2018	空音	ドイツ国際軍楽祭 2018 Musikfest der Bundeswehr 2018 (空音のみ)	<a href="https://youtu.be/gGQRr4UVfS0?si=7zmjtm4Ogd9ivutQ">https://youtu.be/gGQRr4UVfS0?si=7zmjtm4Ogd9ivutQ</a>	
11	2018	空音	オランダ国際軍楽祭 2018 Nationale Taptoe 2018 (空音は1:23:06～)	<a href="https://youtu.be/X_6WgPqVB3k?si=KHYN0GLNyULnJCE&amp;t=4986">https://youtu.be/X_6WgPqVB3k?si=KHYN0GLNyULnJCE&amp;t=4986</a>	
12	1988	独連邦軍 中央軍楽隊	'88 マーチングバンド世界選手権 International Marching Band Pageant (独軍楽隊は32:40～)	<a href="https://youtu.be/hSloXOxXgD0?si=ExWbMXbY4Ed8jIho">https://youtu.be/hSloXOxXgD0?si=ExWbMXbY4Ed8jIho</a>	
13	2019	独連邦軍 参謀軍楽隊	令和元年度自衛隊音楽まつり JSDF Marching Festival 2019 (独軍楽隊のみ)	<a href="https://youtu.be/syK4l4DnXQo?si=emfyJSlocFpb3elh">https://youtu.be/syK4l4DnXQo?si=emfyJSlocFpb3elh</a>	

巻末資料 2

別表 2

音楽隊海外演奏国・自衛隊音楽まつりゲスト国一覧

自衛隊中央音楽隊等（フル編成のみ）の海外派遣演奏				自衛隊音楽まつり参加ゲストバンド			
時 期	派遣部隊※	派遣先国、都市	時 期	国名・バンド名			
1999年	7月	空音	カナダ、ハリファックス 米国、ワシントン D.C.	1999年	H11		
2002年	10月	陸中音	韓国、江原道（カングォンドウ）	2002年	H14		
2004年	10月	陸中音	韓国、原州（ウォンジュ）	2004年	H16		
2009年				2009年	H21	米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2010年				2010年	H22	シンガポール軍楽隊、米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2011年	10月	陸中音	韓国、鶏龍（ケリョン）	2011年	H23	米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2012年				2012年	H24	米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2013年				2013年	H25	タイ王国陸軍軍楽隊、米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2014年	5月	海東音	ノルウェー、オスロ	2014年	H26	豪陸軍軍楽隊、比軍軍楽隊、米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2014年	5-6月	陸自北部 方面音楽隊	ロシア、ハバロフスク				
2014年	7-8月	陸中音	フィンランド、ハミナ				
2015年				2015年	H27	韓国海軍軍楽隊、米陸軍・海兵隊・空軍・海軍軍楽隊	
2016年	7月	海東音	スイス、バーゼル	2016年	H28	インド陸軍軍楽隊、米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2017年	8月	陸中音	英国スコットランド、エジンバラ	2017年	H29	タイ王国空軍軍楽隊、米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2018年	9月	空音	ドイツ、デュッセルドルフ オランダ、ロッテルダム	2018年	H30	フランス海軍軍楽隊、シンガポール軍楽隊、 米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2019年	6-7月	海東音	カナダ、ハリファックス	2019年	R1	ドイツ連邦軍参謀軍楽隊、ベトナム人民軍総 参謀部儀礼団軍楽隊、米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2019年	8-9月	陸中音	ロシア、モスクワ				
2020年				2020年	R2		
2021年				2021年	R3		
2022年	7月	空音	フランス、アルヴェールビル	2022年	R4	パプアニューギニア軍軍楽隊、パキスタン陸 軍軍楽隊、米陸軍・海兵隊軍楽隊	
2022年	11月	陸自西部 方面音楽隊	オマーン、マスカット				
2023年	6月	空音	ベトナム、ハノイ	2023年	R5	マレーシア軍中央軍楽隊、米陸軍・海兵隊軍 楽隊	
2023年	8月	空音	スイス、アヴァンシエ				
2024年	7月	陸中音	スウェーデン、エークシェー	2024年	R6	ヨルダン軍軍楽隊、米海兵隊軍楽隊	
2024年	7月	空音	フィリピン、マニラ				
2025年	4月	空音	米国、ノーフォーク	2025年	R7	（執筆当時は未実施）	

※陸上自衛隊中央音楽隊：陸中音、海上自衛隊東京音楽隊：海東音、航空自衛隊航空中央音楽隊：空音と表記。  
 なお、これとは別に、海上自衛隊練習艦隊音楽隊が遠洋練習航海において臨時編成され、各国で演奏活動を実施。  
 （出典：各音楽隊ホームページなどを基に、筆者作成。）

